臨床経験のある助産師学生についての研究
―学生生活の実際と臨床経験が及ぼす影響―

Study on Birthing Assistance Students who have Previous Clinical Experience
―Influence to the Lifestyle of the Students by Clinical Experience―

鈴木　由美，島田　葉子

要 約

臨床経験のある助産師学生が1年課程の助産師養成機関への入学動機，入学準備，及び入学してから直面した事などを分析し，助産師教育における課題と対応策を検討する目的で5名にインタビューを行った．その結果入学動機は3つのカテゴリー「夢を追って」「機会を得て」「モデルの存在」で構成された．入学後に直面した事は3つのカテゴリー「久しぶりの勉強」「実習の大変さ」「家族の理解」から構成されていた．臨床経験と実習については2つのカテゴリー，「実習における強み」「実習における弱み」で「異年齢の学生との相互作用」については，2つで「学生同士の世代間相違」「相互作用」であった．

対象者5名は看護師になる時から助産師になる計画をしており，子育て等で一旦進学希望を延長しても経済的な基盤や家族内の調整などに苦慮していた．また入学後は，現役の学生と相互作用でパソコンスキル等を高め，実習においては学生になりきろうと努力して学生生活を送っていた．

キーワード：臨床経験，助産師教育，職業選択動機，学生生活

Ⅰ．はじめに

近年，助産師教育機関は多様化しており，1年課程の専修学校のほか，大学専攻科・別科，或は大学院でも養成されている[1)]．特に1年課程の助産師養成機関では，一旦看護師としての臨床経験を経て助産師を目指す学生（以下　臨床経験者）がいる．本学別科助産専攻においても，短期大学専攻科の時から臨床経験者は毎年3割～5割程度を占めている．

1年課程の助産師養成機関では，卒後に助産師として就業できることが保証されている個人病院や診療所からの進学者もおり，卒後には管理職としての職位が保証されている背景などもあり，それぞれの学生のキャリア開発の選択肢の一つとして助産師養成課程への進学を考えるのではないかと推測する．キャリアとは一般に組織内での昇進，昇格，或はその種の専門職とすることが多いが，看護職の高学歴化，専門看護師，認定看護師制度の誕生に見るように，看護職の中に質的な変化が生じているといわれている．保健師，助産師などへの進学も一つのキャリアアップだと考えることができる[2)]．

1年課程の助産師養成機関で特に大学別科の場合は，大学卒の学生も含めて専修学校，短期大学などの卒業者も入学できるため，臨床経験者の中には様々な生活背景を持つ者がおり，多彩なクラスのダイナミクスが展開されている．教員もその対応に苦慮する部分もあるが，学生は長い間の夢や希望を叶えるために，勤務しながら，或は家庭生活などの調整をしながら受験対策をし，異年齢の学生と共に講義や実習に臨むため学生生活での様々な課題に直面する状況が見受けられながら交友関係を深めている．今後も毎年入学が予測されるこのような学生に焦点を当て対応を検討することは助産師教育において有意義と考えた．

そこで今回は臨床経験のある学生5名にインタビューを行い，助産師を志望した動機，助産師養成機関へ入学準備，及び入学して直面した問題などについて聴取，分析したので報告する．

キーワード：臨床経験，助産師教育，職業選択動機，学生生活

Ⅱ．研究目的

臨床経験のある助産師学生が1年課程の助産師養成機関への入学動機及び入学してから直面した課題，異年齢の学生同士のコミュニケーションなどを分析し，助産師教育における課題と対応を検討する．

Ⅲ．用語の操作的定義

臨床経験：ここでは看護師の経験があり，診療科や年数は問わない．また臨床経験がある助産師学生を臨床経験者とする．

キャリア形成：職業能力を計画的に向上させ，キャリアアップも含めて職業履歴を積み上げること．

進学動機：看護教育後臨床経験を経て，ここでは助産師養成課程に特化し，進学を希望したきっかけ，動機．

異年齢：看護学校，大学など現役の学生が21～22歳に対して年齢が異なること

Ⅵ．研究方法

1．研究対象

X 大学の1年課程の助産師養成コースの学生で臨床経験を有する学生のうち，インタビューの同意と IC レコーダーへの録音に許可を得た5名．

2．**調査期間**：平成26年3月15日～3月20日

3．**調査方法**：学生5名に対してインタビューは個室で行い，他者の入室ができないようにし，集中して話せるように他の音声が入らないよう調整した．面接に要した時間は一人あたり10～20分でその内容は本人の同意を得て IC レコーダーで録音した．聴取した記録は逐語録をとり，同じ意味の文脈単位にまとめ，コーディングしたものをサブカテゴリーとし，更に同一サブカテゴリーと思われるものをカテゴリーとしてまとめ，最終的に命題する内容分析の方法をとった．分析過程においては偏りを防ぐため，共同研究者と繰り返し検討し，質的研究に熟達した研究者のスーパーバイズを受けながら行った．

4．倫理的配慮

本研究は平成25年に X 大学倫理委員会の審査にて承認を受けてから開始した．また，対象者へインタビュー前に研究依頼書を提示して研究方法，目的，インタビュー実施後のデータ収集の内容と方法，個人情報の保護と研究終了後のデータの安全な処分方法について説明を口頭及び紙面で行い，さらにインタビューに応じない場合や途中で中断した場合でも教員から対象者への対応に不利益はないことを伝え，対象者より許可を得た．

Ⅴ．結果

1．対象者の背景

今回の対象者5名の背景は表1に示す通りであった．年代は20歳代～30歳代後半におよび，臨床経験は4～15年の間であり，平均10.2年であった．既婚学生は3名であり，そのうち子どもがいる学生は2名であった．経験した診療科は産婦人科2名で，そのうち1名は大学病院，もう1名は開業の診療所であった．3名は内科，外科など産科以外の診療科の経験者であった．また助産師でなければ産科に配属されない施設の規定があり，内科，外科などに配属されていた．

そのうち1名は施設で助産への進学希望者が優先して産婦人科に配属になる制度があったため，他科で産婦人科の配属を待機していた．

2．進学動機

今回の対象者5人は看護師になる前から助産師になりたいという意思があって看護学校に入学していた．

学生が入学するまでの動機は表2の通りであった．

表1　対象者の背景

	年代	臨床経験年数	経験した診療科	職位	施設	生活背景
学生１	30 歳代後半	15 年 (産休含む)	産婦人科	臨床指導者	診療所	子ども２人
学生２	30 歳代前半	10 年	内科	臨床指導者/プリセプター	個人病院	子ども２人
学生３	20 歳代後半	7 年	内科	臨床指導者/プリセプター	総合病院	既婚
学生４	20 歳代後半	4 年	産科	スタッフ	大学病院	
学生５	30 歳代後半	15 年	外科、泌尿器他	臨床指導者/プリセプター	総合病院	

表2 進学動機について

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
夢を追って	憧れ	漠然とした希望
		幼少からの夢
		高校生からの憧れ
		看護師になるのは助産師になるため
	希望が再燃	遠ざかった条件からの進学希望の再燃
		子どもが生まれて落ち着いたので再燃
		希望していたが子供ができて中断
機会を得て	計画して	受験が優先されるため産科に異動
		複数受験し合格した
		学費を稼ぐために看護師として働く
		夜勤のない施設への転職
		合格したら運命だと思った
	施設の勧めで	助産師育成制度の紹介による
モデルの存在	看護師の限界	産科での限界を体験して
		患者からみても助産師のほうが看護師よりもよいのではないか
		看護師として働いて意志を確認した
		自分を深めるため
	客観視して	同じ部署の先輩、同僚の助産師をみて気持ちが固まる
		兄弟、家族などの目、期待に添うように

「夢を追って」「機会を得て」「モデルの存在」の3つのカテゴリーが抽出された．「夢を追って」は【憧れ】【希望が再燃】の2つのサブカテゴリー，「機会を得て」は【計画して】【施設の勧めで】の2つのサブカテゴリー，「モデルの存在」は【看護師の限界】【客観視して】の2つのサブカテゴリーで構成されていた．

以下イタリック体は語りの内容（原文）で記した．

「*もともと助産師になりたいって思っていて，で，まあ，産科につとめたので，そうこうしているうちに子供ができちゃって，そのままでもいいかなって思っていたんですけど，県のほうで，なんか，助産師の育成の病院側の補助とかがいろいろあったので*」（学生1）

「*看護学生の時に既に進学希望だったんですけれども，それで奨学金を受けていたので3年は働くということで産科がある病院に入ったんですが，産科がなくなってしまって，そのまま結婚出産とかがあったんで，何となく忘れていたんですが，そろそろって子どもが二人目が生まれて落ち着いたので，やっぱり助産師になりたいっていうんで，これで受けて受かったら，きっと運命だと思って，やろうと思って，学生の時からの夢でした，純粋に.*」（学生2）

学生1，2は既婚で子供がいて進学を決意しているが，本来の生活設計において，看護職に就いた時点で助産師になることを予定していた．出産，育児などのライフイベントで一旦延期しても，助産師になりたいという希望が再燃して受験していた．

「*先輩助産師の姿をみて，本当にやりがい，責任重いですけど，やりがいのある素晴らしい仕事だなって思って，で働いている中で助産師ができる仕事，看護師が出来る仕事，お産とれる，とれないって一番大きいんですけど（中略）『助産師さんですか，あなたは』と聞かれて『私は看護師です』というと『あ，じゃあ，助産師を呼んで下さい』っていわれるときもあったんで，もしここで専門的に働くんだったら，やっぱり助産師っていう資格をもっていたほうが患者さんとしてもいいだろうなって思ったし　　*」（学生4）

学生4は最初から助産師になるつもりで看護師になって一旦就業したが，産科では職能の限界を感じていた．またモデルの存在について，自分が本当に助産師になりたいのかどうかを看護師として産科に勤務する中で「客観視して」助産師としてのモデルの存在があった．分娩介助ができるかどうかの「看護師の限界」を感じながら，患者にとっても看護師よりも助産師のほうが良いのではないかと考えて自分の「意志の確認」をしていた．

3．学生生活について

1）入学後に直面したこと

X大学の1年課程の助産師教育において必須単位は32単位（選択必修単位1単位を含む），そのうち実習の単位は11単位（405時間）で三分の一を占め，この教育機関では7月～12月の間で10～15週間程度の助産学実習がある．入学後に直面したことについては表3の通りであった．「久しぶりの勉強」「実習の大変さ」「家族の理解」の3つのカテゴリーが抽出された．それぞれ「久しぶりの勉強」は【パソコンスキル】【慣れない授業】【学生の大変さ】の3つのサブカテゴリー，「実習の大変さ」は【実習の負担】【実習の工夫】の2つのサブカテゴリー，「家族の理解」は【家族内調整】【家族の支援】の2つのサブカテゴリーから構成されていた．

進学について計画的であった学生は，家族の理解を得られるように検討，協議し，全面的なバックアップ体制の中で学生生活を切り抜けた．

表3　入学後に直面したこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
久しぶりの勉強	パソコンスキル	パソコンスキルが劣っている
		パソコン技術が高い若い学生に教わった
		保健指導案の媒体作成に苦慮した
	慣れない授業	覚えたつもりでも頭に入らずに出ていくことが多かった
		授業中に寝てしまう
		興味があるので苦にならない
		興味があるので楽しい
	学生の大変さ	最後までやらねばならないと思うと、純粋に学生になることは難しい
		久しぶりの学生生活を体験した
実習の大変さ	実習の負担	寮生活で実習が落ち着いてできた
		寮生活で遠い実習施設でも落ち着いて取り組めた
		実家から実習に行って妻の役割が果たせない
		経済的な負担を少なくした
	実習中の工夫	夜間の安全を考慮した
		指導者より年上でも難なくやり遂げられた
		一緒の実習グループの学生のチームワークが良かった
		学校で実習希望施設を聞いてくれた
家族の理解	家庭内調整	入学前ガイダンスで家庭内の調整を知った
		入学前に看護実習との相違を家族に話し、綿密に調整した
	家族の支援	自分の努力ではなく家族のおかげで苦労なく最後までやり遂げた
		夫の両親の協力で夜間の実習を乗り切り、継続事例も全面的にバックアップされた
		子どもの行事に家族の協力を得た

「*隣に夫の両親が住んでいまして，夜間もみてくれることがありまして，（中略）家族でよく話し合って，こうなったらこうなるとかって言うのも考えて，実習はもう看護の実習とよく照らしあわせて，帰れなくなっちゃたりっていうのがいっぱいあるし，全部相談をして，もう綿密に調整をして結構家族も，継続さんとか，ま，先生もですけど，一晩家族がみてくれたりだとか，ま，本当に家族が全面的にバックアップしてくれたので，私は特に努力したんじゃなくて，なんで本当に，そういう面では苦労しなかったかなと思う.*」（学生2）

入学後，パソコンスキルが劣っていると感じた学生が多く，現役生で優れた技術のある者から教えてもらうなどの経験をし，刺激を受けていた．

「*パソコンが不慣れだったので，結構パソコンを使ってレポートをかいたりすることが多かったので，最初，あ，どうしようと思ったんですが，年齢がちがう若い子たちにいろいろ，パソコンを教えて，パソコンの技術が高い子にいろいろおしえてもらうことが多かったのでそこでクリアできたかな，と思いました.*」（学生5）

助産師業務の中で保健指導は重要な位置を占めるが，保健指導技術の講義，演習においてパソコン使用は不可欠となる．ワードでの指導案作成の他，媒体作成において挿絵や写真を挿入する技術が不可欠で苦慮していた．

「*なんかパソコンで保健指導とか指導案作ったりパンフレットを作ったりっていうのがちょっと大変でした．（パソコンが）使い慣れているんですけど，要は媒体つくるのに，ネットの写真をもってきたりとか，どうやってアレンジするのかと，その辺が大変でした*」（学生3）

今回の対象者の殆どが，病院などで電子カルテなどには慣れているものの，文書作成などパソコンスキルについて入学後に困難を呈していた．

2）異年齢の学生とのコミュニケーション

異年齢の学生たちとのコミュニケーションは表4の通りであり，「学生同士の世代間相違」「異年齢の学生たちとの相互作用」の2つのカテゴリーが抽出された．それぞれ「学生同士の世代間相違」は【対等になれない学生同士】【年上という意識】【同等になる努力】【若い学生から頼られたい】の4つのサブカテゴリーから「異年齢の学生たちとの相互作用」は【異年齢の集団】【今どきの子たちから受ける刺激】の2つのカテゴリーから構成されていた．

今回の対象者の年代は28歳～38歳で（26年3月の満年齢），現役で大学卒業後の入学生は22歳，また臨床経験の長短が学生の年齢差となっていた．しかし，ここでは主に現役学生と自分よりも若い学生を対象とした発言がみられた．

「*世代の差っていうのがどうしても感じて，ゆとり，ゆとりっていうんですけど，私なんかは叩き上げだったんで，先輩が絶対とか，ま，固いなかでやってきたんで，そういう面で気にはしない部分でも，ああ，やっぱりゆとりなんだなとか，（中略）やっぱり，*

表4　異年齢の学生とのコミュニケーション

世代間相違	対等になれない学生同士	対等になろうと努力してもどこまでも気を遣われる
		ジェネレーションギャップを割り切ることができなかった
		ゆとり世代の学生と叩き上げの先輩の差を感じた
	年上という意識	自制心があって年齢が違う学生と一緒にふざけられない
		自分の年令ゆえ行動をセーブする
		一緒にふざけられない
		若い人たちに入っていかれるかどうか不安だった
	同等になる努力	同等になろうとしても年上だとみられて気を遣われて申し訳ない
		同じ視点に立てばよいと頭で考えていてもできなかった
	若い学生から頼られたい	臨床経験者が半分くらいいたので若い子は後輩を見ているような気持になった
		グループワークで困難な学生の調整をしなければという責任感があった
		看護職としてのアドバイスができて頼られていることが支えとなっていた
		お姉さん的な立場で、嫌なことを相談できないでいても働きかけてくれた
相互作用	異年齢の集団	同級生がいい子だったので楽しい学生生活だった
		一旦社会に出ると年齢の違う人と勉強でいないので密な関係ができた
		助産の学生としては同期なので年齢差があっても受容できた
		様々な年齢層だったので入りやすかった
	今どきの子たちから受ける刺激	学生らしくあるということを考えさせられ勉強になった
		同世代と違って新しい知識、考え方、今の子の考え方が吸収できた
		新しい知識と考え方が違う今の子から学ぶことが多いた

ジェネレーションギャップとか，そういうのは，やっぱり多少ってか，全体感じてはいたんですけど，新しいものだと思って，まあ，吸収するのは大変だったんですけど，でも自分も同じ視点に立てればいいのかなと，」（学生2）

「やっぱりあのお姉さん的な立場で，相談にのって頂いたりとか，私自身があんまりちょっといやだなと思ったことを（私は）あまり言わないタイプなんですけど，そういうのを察してか『どう大丈夫』とか声をかけてきてくれたので，すごくありがたいなと思いました．」（学生4）

「やっぱり，気を使われるから，そこが申し訳ないなって感じです，なるべく仲良くしようと，同じ立場で，同等でいたいなと思っても，やっぱりむこうは多分，自分のキャラもあるかと思うんですけど，向こうは年上の人って目で見られてるのが，申し訳ないって気持ちだし，なるべくそういう気持ちに向こうがならないように自分が仲良くしようとして，ある程度は仲良くなってるからいいけど，まだ年上って見られてるので，その辺の同調できない部分はあります．」（学生3）

学生同士はなるべく対等になりたいと考えていても，年下の学生の方から気を遣う傾向がみられた．特に臨床経験があり，年齢が少しでも上であるという点で敬語で話しかけられるなど，対等ではない接し方をされる傾向があった．

4．臨床経験が実習に及ぼす影響

臨床経験が実習に及ぼす影響ついては表5の通りであった．「実習における強み」「実習における弱み」2つのカテゴリーが抽出された．

「実習における強み」は【臨床指導者・教員からの期待】【コミュニケーションスキルの優越性】【産科での経験のメリット】の3つのサブカテゴリー，「実習における弱み」は【診療科による相違】【現役生との差別】【学生らしく振る舞えない】【学習能力の相違を感じる】の4つのサブカテゴリーから構成されていた．

表5 臨床経験が実習に及ぼす影響

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実習における強み	臨床指導者・教員からの期待	臨床にいたので応用が効く
		経験があると追求されるところが違う
		学生らしさと経験ゆえの期待の双方を要求される
		合併症妊娠に対応できると評価された
	コミュニケーションスキルの優越性	初対面の人に対応するのが苦にならない
		コミュニケーションがスムーズだった
		応用がきくのが長所だと思う
		年齢差は思ったよりも問題にならず、指導者との関係性が保たれた
		スタッフには恵まれていたので困らなかった
		就職先で実習したので人間関係の土台がつくれた
		怖い指導者も就職してスタッフ同士に習うと変わるだろう
	産科経験のメリット	覚えなければならないことが少なくて済む
		産科の経験があるため勉強が難しくなかった
		産科の経験で臨床の慌ただしさとギャップがなく、受け入れられた
		母性看護の基礎に経験をプラスするので勉強がスムーズだった
実習における弱み	診療科による相違	外科系の経験がないのでお産への対応が心配
		内科の綿密さと産科のアバウトな部分の相違があった
	現役生との差別	臨床指導者の経験があったことを追求される
		臨床経験ゆえに追求されることが違う
		謙虚な態度のレギュラーな学生は純粋で良い扱いを受ける
		何をしても否定されるのでぎこちない実習になった
	学生らしく振る舞えない	「言わなくてもわかるだろう」という気持ちが記録物などに表れる
		就職したら初心に戻ってやっていけたらという自分の課題ができた
		指導者と教員の関係で教員への気遣いがある
		動けると指摘されるのでわからないふりをして葛藤した
	学習能力の相違	年齢が高いので記憶するのが大変である
		深読みしすぎて国家試験受験でも考えすぎてしまった
		自己流が多々あり、基礎の振り返りが必要と反省した
		わかっていると思い込み、手を抜いていると評価される

「実習における強み」として臨床経験で得たコミュニケーションスキルが高く，他科での経験があるため，妊産婦に合併症があってもアセスメントして冷静に対応できるため，指導者や教員から期待されるメリットとなっていた．以下*イタリック*体は語りの内容（原文）で記した．

「*やっぱり人とあたる，初対面の人とあたるとかそういうのは苦じゃなかったので，そういう所は良かったのと，あとは合併症妊娠とかの方もいらっしゃったりしたので，そういうこととかもからめられたりと，そうですね，そういうのも生かせるよって指導者さんからもコメントをいただいたので，今後就職するにも活かして行けますよ，というのがあったんで，無駄じゃなかったって　　*」（学生2）

特に産科での臨床経験はその現場の産科特有のケアなどの経験から，改めて覚えることより臨床経験を深める学習で抵抗なく取り組めていた．

「*私は産科にいたので，経験があった分，勉強が入り込みやすいかなってのが長所だと思います．新たにいっぱい覚えなければならないってことが，ほかの人に比べればすこし少ない，年齢的には記憶が　　*」（学生4）

一方で「実習における弱み」で産科以外での臨床経験者では，医療現場に慣れていても雰囲気が違うことから馴染みにくく，現役生が指導者から受ける対応との相違を感じていた．

「*産科的コミュニケーションってのはむずかしいですけど，あとなんて言うんですか，医療の現場になれているから，なんていうんですかね，あの雰囲気になんとなく　　学生らしい，らしくする，謙虚な態度とか，その実習に行ったレギュラーの子をみていると，やっぱすごいなと思います.*」（学生3）

また看護学生から年数が経過しているため，基礎知識から離れていて，臨床経験が長いため自己流になっていたことが弱みとなっていた．

「*基礎を忘れていることだと思います．自己流っていうか，そういうところが出てしまうところが多々あったと思いました．やっぱり基礎を振り返って，基礎を身につけて行くべきだなって反省しました.*」（学生5）

臨床経験があることで現役学生に比べて習得までの時間が短いメリットがあると推測するが，必ずしもメリットとなりえない状況がみられていた．臨床経験が長いと自己流になりやすく，基本に戻るのが困難な状況があった．

Ⅵ．考察

1．入学動機と職業的アイデンティティについて

助産師の志望動機について，野本ら[3]は「生命誕生に関わりたい」「助産師という専門職へのあこがれ」「他者からのおすすめ」「経験からの選択」「同性への関心」「他との比較による選択」，小泉ら[4]は「助産師へのあこがれ，生命誕生への感情や赤ちゃんが好きという助産師という職業への『肯定的感情』や母性看護実習の学習体験で興味を持った，助産師資格を取得したいという自分のアイデンティティ確立の要素のひとつである『なりたい自分』の2つのカテゴリーがある」と述べている．

今回の対象者5名は臨床経験者であり，殆どが看護師になる前から助産師になりたいと考えており，母性看護実習がきっかけになった者はいなかったが，高校生以前からあこがれという者もいた．田川[5]らは助産師の職業的アイデンティティ形成過程において「助産師になりたいと決めた時期，臨地実習の体験が影響していた」と述べている．対象者はほぼ全員が長い間助産師になりたいと考えており，それぞれに計画した看護師のキャリア形成をしていた．

また山崎[6]によると「入学前の助産師志望動機が強いものは助産師志望動機が弱いものに比較して，入学後の学習意欲が高い」と言われている．今回の対象者は入学前から強い動機を持ち続けて生活設計をしており，準備も計画的であるため，学習意欲も強かったのではないかと考える．

また一部の学生は仕事を継続させながら，看護師として働きながら学費を稼いでいた．中には助産師学校を受験するために時間を確保したく，勤務先を夜勤がない診療所などに異動させており，長いスパンで助産師になるための行動計画を立て実行していることから，決断が大きいことが推測できる．特に既婚者で子どもがいる学生では，助産師教育課程に進学したいことを家族に相談して検討し，理解を求めて，家庭内調整をつけて入学してきた．一旦受験希望を中断したものの，優遇制度があり，希望が再燃した者もいた．またその際に学費を稼ぐこと，資金を集めるために予備校などに通うことなく，周囲の協力を集めて教材を収集していた．

2．学生生活について

今回対象の学生たちが入学後に直面した問題は，久しぶりに学生になることで授業についていかれない，集中できない，勉強することへの苦痛などがあり，慣れない学校生活に久しぶりに専念することの大変さ，その中でもパソコンスキルが十分でないため苦労していた．看護職以外の社会人経験者は他の職業を経験していることから，接遇やパソコンスキル，学生としての望ましい態度について心得ており，コミュニケーションスキルなどは優れているという高橋[7]の見解もあるが，看護職の臨床経験だけでは電子カルテの扱いには慣れていてもパソコンで文書を作る，挿絵を扱うなどのスキルには限界があり，一方実習や演習などでは臨床経験があることから抵抗がなく学習でき，また実習では対象者とのコミュニケーションスキルが優れているため，現役の若い学生たちとの相互作用でクラスのグループ・ダイナミックスがバランスよくいくものと考えられる．

また実習においては，診療科が異なる事からの戸惑いや実習指導者が学生よりも年下のこともあり，困難性を感じていた．指導者が自分よりも若くて戸惑いを感じたり，臨床経験があっても学生になりきるように努力したりしたが，必ずしもスムーズに学生になりきることができなかったことが窺える．

今後，臨床経験の年数や臨床での職位やポジション等を考慮したうえで，どのような学生でも学ぶ姿勢が明確で学生らしい態度がとれるようにガイダンスをす

る必要があると考える．この学生らが入学した年度より入学前ガイダンスを行っており，効果がみられたと結論できる．

また武森ら[8]は看護学生で社会人経験のある者は年齢が違う学生との関わりなどにおいて「専門的な学習が楽しくてたまらない」「看護職を目指す仲間と共に補いながら成長できる」「学習に関係なくスタンスに変化はない」と述べており，今回の調査でも「今どきの子たちから受ける刺激」を受けながら「慣れない授業」を受け，「学生の大変さ」を実感し，「実習の負担」を感じながらも「実習中の工夫」をし，「家庭内調整」「家族の支援」を得ながら乗り切っていた状況は，看護職以外の社会人経験のある看護学生を対象とした先行文献と類似していた．

そして今回の調査で臨床経験のある学生の何人かは，学生らしく行動することについて苦慮し，実習指導者との人間関係に調整を要した．また保健指導案や助産過程の展開に苦慮し，平成9年のカリキュラム改正以前に看護師になった者がいたことなどがその原因だと考える．教育機関，臨床ではカリキュラムの内容に敏感になり，学生たちの背景を考慮しなければならない．

一方で，長い臨床経験からの経験知もあるため，助産過程を軽視し，看護師としての行動がとれれば何とかなると考えている者もいた．看護師の経験は学生としての学びの姿勢を軽視することがあるため，助産師としての態度形成も促す必要がある．現役生も含めてそれぞれの看護師免許を取得するまでの看護教育課程を考慮し，それぞれの教育背景や生活背景なども汲んだ個別的な指導が必要となる．

3．異年齢の学生とのコミュニケーション

前田[9]は異年齢の学生について，学生一人一人の今までの経験や価値観を認め，成長していく過程を支えていくこと，学生は皆同じ看護を学んでいるということを学生自身が意識できるように関わることが必要と述べている．臨床経験のある学生については，これまでの経験が糧となることに期待し，何歳であろうと学生の一人として扱い，また実習においては他の学生と同様に接するように調整し，学生らしく行動できるように方向付けする必要がある．臨床経験者たちは，異年齢の学生たちとどこかで「同等になるための努力」をしながらも「年上だという意識」があり，「異年齢学生から頼られたい」「対等になれない学生同士の関係」があることを否定できない．実際に現役生や年齢が若い同級生たちから敬語で話しかけられ，年上を意識された状況が見受けられる．しかし学生の立場として「臨床経験があるから先輩である」といった意識や上下関係をつくらないように注意が必要である．

また渡邊ら[10]の報告によると，社会人経験者の学習姿勢は模範的な学習者としての側面と，指導に困難さを感じている側面があり，教員や指導者からの指導に対しては「自分が正しいという思いが強い」「自分を曲げられない」と表現しており，「不十分なリフレクション」があるものとされていた．「経験に頼る傾向」「強い価値観」「ゆっくりな成長」などもあり，「学校の指導方針などに対する批判的な態度」「授業内容に対する批判的な態度」「職業人モデルの批評」などがあるため，指導に困難性を感じやすいと述べている．教員や指導者に対する態度ばかりでなく異年齢の同級生に対しても，「自分が上である」といった態度をとり，グループワークなどで困難な場面があることは散見される．このことから講義，演習などでグループワークを予定している場合は，臨床経験者と現役生などが混在するグループ編成をするなどの調整も必要である．

臨床経験がある学生は何年かの看護師としての経験から看護観が築かれており，教員や指導者に対して批判的な態度，客観的に観察するなどの行動がみられ，このことは個人の資質にもよるが，これまで培ってきた看護師としての価値観，経験知などが自信となっており，自分たちより若い学生たちに顕示したいのではないかと考える．助産師学生として1年間でアイデンティティを再形成できる重要な時期であるため，看護観などを認めながらもこれまでの経験に固着することなく，柔軟な姿勢で学習に臨むように教員が促す必要もある．現役のソーシャルスキルが身についていない学生たちと同じように対応することが必ずしも適切ではないことも踏まえて，価値観や自尊心を尊重しながらも適否をはっきりさせて接することが望ましいのではないかと考える．

4．臨床経験が実習に及ぼす影響

人生経験や臨床経験があることで現役の学生からは一目置かれる立場となりやすい．同級生ばかりでなく教員，指導者なども最初は現役の学生とは同様に対応しようと努力する反面，期待や困難感などを抱きながら対応していることがある．林ら[11]の社会人経験のある看護学生を対象とした研究では学生への指導方法として「一人の看護学生として見る」「自らの経験が反映された指導」「グループの一員として指導」などを挙げている．また「指導の困難感」については「社会

人経験がある学生の背景が見えない」「出産，育児経験の実習への障害」等の因子がある中で，看護学生の一人としてまたグループの一員として対応することの必要性をあげていた．

今回の調査の中でも「現役生との差別」がマイナス因子として挙げられた．学生らしく行動したいが，臨床経験があることからつい手を出したくなる一方，できないと「臨床経験があるのに」と指導者に注意されるなど，学生として周囲の評価の中で葛藤している者もいた．また教員側からみて，このような学生は臨床経験があることで「指導の困難性」が予測できる．前田[12]の報告では社会人経験者はそうでない学生に比して「教員の否定的な関わり」などを強く感じているため，教員や指導者にとって社会人経験のある学生の本来の長所が「やりにくさ」となって，指導の困難性となり，否定的に感じられるのではないかと考える．臨床経験のある学生は，実習においては臨床経験ゆえにスムーズな行動がとれるメリットがあり，それが「実習における強み」となっている．

また，自分の臨床経験における経験知をゼロにして学ぶことができない学生がいることも推測できる．異年齢の現役学生にとって，このような臨床経験者に対して劣等意識をもちやすいことも考慮し，グループ・ダイナミックスを考慮した実習配置を検討しなければならない．学生も臨床経験があることで，学生になり切れずに葛藤している場合もあるため，適切な行動がとれるような助言が必要である．所詮，看護師の経験が何年あろうと，助産師学生としては現役生と公平に接することが必要である．小野田[13]によると，社会人経験者は入学動機や将来への目標などしっかりした内発的動機付けの高さが影響しており，リーダーシップや積極性などは社会経験で身についていることも考えられるが，その人の性格や培われてきた過去の経験，生活歴も影響するため一般化できないと述べている．現役の学生らと同様に接する一方で，背景を汲んだ個別的な対応を心掛けると同時に，入学前にガイダンスを行い，レディネスを整え，家庭内調整などを行うよう指導することは有益である．

近年，経済不況により女性の就業形態に変化がみられており，それが看護学生の背景の変化，進学動機などに影響を与えている．1986年に男女雇用機会均等法が施行されて女性の就労環境が変化して女性のキャリアが大きく変化したといわれているが，武石[14]によると我が国の女性の労働市場への参加状況は基本的に大きな変化がなく，日本は他の先進国に比して男女間格差など特徴的な部分が根強くあることは否定できない．今田[15]によると都市中間層の女性の成功とは「良妻賢母になる」ということであったという時代に，理想的な女性像のカテゴリーの一つとして「労働者」の中に「助産師」「看護師」が含まれていることが興味深い．このような根強いジェンダーバイアスがある社会で，助産師という職業を選ぶのは性差に左右されないことなど賢明な選択なのかと考えることもできる．日本の社会情勢の中で経済的にも社会的にも就業継続が可能で，キャリア形成ができる看護職を選ぶ人たちが増えている現状があり，看護師とは異なり女性だけがなれる助産師を選択する社会人経験者たちが増える現象はこの先も続くのではないかと考える．

常に異年齢の学生で構成されている1年課程の助産師教育機関では，学生の背景を把握し，強い職業選択動機が維持でき，学生の目標が達成でき，教育効果が十分に得られる方法を模索していく必要がある．

Ⅶ．結論

研究の限界として，今回の対象者は5名であり，結果を一般化することはできないが，臨床経験のある助産師学生の入学動機および課題は次の通りであった．

1. 臨床経験者は看護師になる時にすでに助産師になりたいと考えており，それぞれが経済の調整をし，周囲の協力を得て助産師学校への受験を試みていた．
2. 入学直後は異年齢の学生たちに馴染むための努力をしていたが，相互作用で支援し合い，時に年齢差ゆえに頼られたいという気持ちからグループ・ダイナミックスが形成されていた．
3. 臨床経験者は実習などにおいてメリット，デメリットがみられ，臨床の場での行動，および指導者などとの関係に苦慮し，葛藤がみられていた．
4. このような学生は今後も増える可能性があるため，教員は苦手意識を持たず，強みを認めながらも他の学生と同様に関わる中で個別的な対応も必要となる．

Ⅷ．終わりに

今回は対象が5名で一大学の学生との面接であるため，結果を一般化することはできないことが本研究の限界である．また研究者のインタビュー技術の未熟さが研究結果に影響している可能性もある．今後は1年制助産師養成課程入学者が今後も予測される社会人経験者，子どもがいる学生のデータを増やす予定であ

り，更なるインタビュー技術の向上が望まれる．

謝 辞

本研究にあたり，卒業直前で多忙な時期に貴重なお話を聞かせていただき，ご協力いただきましたX大学の修了生5名の皆様に心より感謝いたします．

引用文献

1) 全国助産師教育協議会ホームページHP　http://www.zenjomid.org/qa_03/index.html
2) 日本看護協会，看護白書平成25年度版，2013.
3) 野本正子，室津史子ら，助産師の志望動機に関する検討，母性衛生46(3)，209，2005.
4) 小泉仁子，太田奈美ら，学士課程の助産学生の職業アイデンティティ形成過程について，～助産実習での体験に焦点をあてて～，順天堂大学医療看護研究，4(1)，64-71，2008.
5) 田川奈保子，宮原春美，助産学生の入学動機と職業的アイデンティティ，母性看護，54-57，2010.
6) 山崎芽衣子，実積麻美ら，助産師学生の入学前の助産師志望動機と入学後の学習意欲との関係，母性衛生，2007.
7) 高橋隆子，社会人経験をもつ看護学生の体験に関する実態調査，神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要，3，25-29，2013.
8) 武森八智代，社会人経験を持つ学士絵の看護専門学校で学習することの意味，中国四国地区国立病院付属看護学校紀要3，91-103，2007.
9) 前田幹香，社会人経験を持つ看護学生の学校生活に関する認知の特性，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター，看護教育研究収録，123-129，2013.
10) 渡邊　惠，鈴木玲子ら，看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感，第43回日本看護学会論文集，看護教育，106-109，2013.
11) 林　聡美，母性看護学実習における社会人経験がある学生への臨地実習指導者の関わり，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター，看護教育研究収録，p167-174，No．38，2013.
12) 前掲書 9）
13) 小野田真弓，社会人経験を持つ学生の臨地実習における体験，神奈川県立保健福祉大学校看護教育研究収録，28，87-93，2003
14) 武石恵美子，雇用システムと女性のキャリア，2-11，勁草書房，ジェンダー分析9，2006.
15) 今田絵里香，「少女」の社会史，107-111，勁草書房，ジェンダー分析17，2007.

Study on Birthing Assistance Students who have Previous Clinical Experience

―Influence to the Lifestyle of the Students by Clinical Experience―

Yoko Shimada, Yumi Suzuki

Abstract

At a birthing assistant training school offering a one-year program, analysis was made for birthing assistance students who have previous clinical experience, in terms of their enrollment motivations for entering the school, and matters faced after enrollment. The study thus carried out interviews with five such students for the purpose of investigating the problems and the countermeasures toward solving those problems in birthing assistant education. As a result, it was found that enrollment motivations consisted of three categories; (1) following one's dreams. (2) obtaining the opportunity and (3) existence of a role model. It was found that matters faced after enrollment consisted of three categories; (1) studying for the first time in a long time (2) practical training problems. and (3) understanding of one's family .

The category which is two about clinical experience and a practical training; The advantage in the practical training , and The weak point in the practical training . The category which is two about students of the different age communication, Difference during the generation and the interaction .

The five subjects had been planning to become birthing assistants since they became nurses, but they had experienced such problems as putting off entering further education facilities due to such matters as child-rearing as well as their economic stability and coordination with family members. In addition, after enrollment, they actively communicated with other students who had directly entered the school without suspension, enhanced their PC skills, and made concerted efforts to become just a student in the practical training.

Keywords: previous clinical experience, midwifery education, enrollment motivations, student life